

“MY TOWN” うおっちんで

# 歩 & 目 足 & ラテス

Vol.73

## 新宮村と土佐街道

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
ヘリテージマネージャー

馬立本陣の正面



今回は、お茶の産地として知られる旧新宮村の界限を歩いてみた。現在は四国中央市新宮町となっているが、新宮ICからも近い、道の駅「霧の森」が人気である。そこに向かうと視野に入るのが、写真の石垣と古色を帯びた門である。説明看

板には馬立本陣とある。元々は馬立村の庄屋石川家の屋敷跡で、この場所は土佐街道に近く、藩政期には土佐藩主の参勤交代時に本陣となっていたようだ。六代山内豊隆候（享保三年・

1718）から十六代豊範候（文久二年・1862）までの間でのことらしい。既に御殿や藩士宿所などは明治三十年の火災で焼失しているが、幸いにも明治初期に正門が円徳寺（市内金田町）に移築された為被災を免れ、昭和五十八年に現在地に戻され復元されたという。見たところ門扉の鉾金具だけでなく、出桁造りの構造に必要以上で並ぶ持ち送り、あるいは正面の臺股の並びもステータスな表現で、そうした造り込みとなっている。何れも身分社会にあつては、庶民には縁遠い意匠。華美な屋根瓦装飾は、あるいは改築時の改変かとも思われるが。



馬立村庄屋石川家の立派な石垣

場と言うらしく、いかにも街道中継地という風情である。きつと土佐藩のこ一行だけでなく、楮、三極などを扱う商人や、椀や盆などを製作する木地師たちなど、必要とする生業によって多くの人々が予土国境を往来したことだろう。

なお進むと馬立川の支流新瀬川との合流地点となり、土佐街道と分かれて道を東に取り宝乗寺を目指す。すると、途中で興味深い建物が私の目視センサーにキャッチされた。これはナンだ、気になる。失礼を省みず、勇気を出して教えて頂くことに。訪れたのは柳原家、この辺りの旧家で、お話によれば明治20年代に母屋と一緒に建てられたものとかで、今は使用されていないが“便所”だった。こうして別棟建てにすることで衛生的にも臭気対策が出来、何よりも農作業



過剰なステータス意匠の見られる正門

柳原家の納屋



便所の佇まい



の肥料として野外での効率の良さを考えた配置になつては違いない。こうした地方における何気ない農家の生活実態が、120年ほどの時を越えて目前にあるというのは、ある意味奇跡に近い出来ごとでもある。加えて、その向こうのトタ

ン葺きとなつた茅葺き民家も、てつきり離れかと思つたが、納屋だと教えられた。宇摩地方の民家の特徴的な三角断面の横棧が三段押えになつていて、質実な造りである。明治期のこの村の経済は、決して悪くは無かつたのではないか、そう思わせる。ただ便所の方は、流石に役に立っていないその維持を考えると、壊す方向も視野にあるよう



宝乗寺の「お葉つきイチヨウ」



新瀬川村庄屋石川家の石垣

だったが、旅人の厚かましきから延命策をお願いしてその場を後にした。またしばらく行くと、只ならぬ石垣。こちらは新瀬川村庄屋・石川家の石垣。石川家同志なので、馬立村と縁続きかも知

れないが、どちらの家屋敷も村長としての威風に満ちて、当時の身分制「土農工商」におけるその地位を考えさせられる。目的の宝乗寺「お葉つきイチヨウ」はここから直ぐ。葉の上に種子が出来るためこの命名となつていて、昭和36年に県天然記念物となつた。今は廃校となつてしまつたが、目の前にある新成小学校の木造校舎とよくマッチして、さぞやこの卒業生にはいい思い出を育んだことだろう。

旧土佐街道の時代から幾星霜、今は高知自動車道が馬立川沿いの谷間の空を抜け、自動車疾駆する。予土国境にある笹ヶ峰越えの難所も、今やトンネルで数分のこと。忙しきつまりは「心を亡くす」現代人が人間性を取り戻すには、この周辺の歴史界隈性はきつと有効に作用する、それが今回の探訪の収穫である。



旧新成小学校 (現・新宮少年自然の家)